

小学校での動物飼育授業における児童の心情変化 ～豚の飼育から出荷まで～

石 川 みどり*・小野塚 知 美**・良 波 祥 吾***・
奥 井 一 幾****・得 丸 定 子*****

(平成27年9月7日受付；平成27年10月30日受理)

要 旨

教育基本法や学習指導要領で命を大切にする教育や生きる力の育成が求められている。そのような教育の一方法として、動物飼育が挙げられ、飼育から出荷、肉の試食までの教育活動がいくつか実践されている。しかし、それらの活動について児童の心情変化の分析に関する報告はない。ゆえに、豚の飼育活動を通した児童の作文を分析し、その活動における児童の心情や教員へのインタビューを通して活動の課題を探った。作文に現れた児童の心情表現は他人事的記述から自分の内面へと向かい、さらに、人間の暮らしについて世界的広がりへと向かう内容に変化していた。一方、作文には飼育活動前から終了まで、「不安感」が現れており、豚の飼育・出荷活動は児童にとって学びの大きいものであると共に、心情的ケアの必要な活動であった。また、動物飼育に携わる教員は活動の充実や喜びの反面、時間的・心理的負担は大きく、動物飼育活動は学校全体、保護者、地域と共に行うことの課題が示された。

KEY WORDS

いのちの教育 life and death education, 動物飼育 breeding activities 小学校 elementary school, 動物介在教育 animal assisted education

1 問題の所在

「生きる力」の育成は、これまでも語られ、今後も語られていくであろう。21世の教育の具体的な方向性として、国立教育政策研究所は「21世紀型能力」(勝野, 2013)の育成を提唱している。これまでの生きる力の育成が教育現場の教員にわかりにくいと言われていたものを、より具体的に示したもので、「21世紀を生き抜くための実践的な問題解決力・発見力に結実するように構造化して示した(西野ら, 2014)ものであるが、その新教育政策が21世紀に向けた生きる力育成の具体的政策かどうかは、教育現場の先生方が今後、何らかの形で批判なり、賛同なりの結果を示すであろう。

いずれにしても、「生きる力」の育成は学校教育のキーワードである。その力の育成の中核は、老若男女、自他共の「いのち」の大切さについての育成教育であると考えられる。「いのちの大切さ」は正面切って口で唱えても誰もが分かり切ったことで、異論のないことであるが、具体的な教育実践となると「難しい」と考えてしまう傾向ではないだろうか。しかし、この教育は別段、「やっているぞ」という旗を振り挙げて行わなくても、どの教科からでも日常的にアプローチでき、日々の何気ない暮らしや教育の中で展開できることである。そのためには、まず教員が自分自身の生き方を考えたり、社会におこる様々な心や命にかかわる現象に気を留めたりして、自分の「いのち」の教育をすることが求められる(得丸, 2008)。

その論は別に述べるとして、こどもに「いのち」の大切さを育成する有効な教育実践として、「動物飼育教育」「動物介在教育」が挙げられ、日本では約8割～9割の小学校で動物飼育教育が実践されている(中川, 2007; 今野, 2010)。そうであるならば、動物飼育に関する研究報告は山のように積み重ねられていると推測していた。しかし、CiNiiとGoogle Scholarで「小学校」「いのち」「動物飼育」をキーワードとして検索(AND検索)してみると、2001年以来、わずか18件のヒット数(2015.3月現在)であり(表1)、その中で、小学校での動物飼育実践に関するものは10件だけであった。さらに、実際の実践に関する研究報告となるとより少なくない報告であり、「いのち」の大切さを育成する小学校での「動物飼育教育」研究論文としては多くは取り扱われていないことが分かった。それらのわずかな研究をひもといて、以下に紹介する。

*魚沼市立広神東小学校 **長岡市立富貴小学校 ***埼玉県行田市西小学校 ****神戸松蔭女子学院大学 *****自然・生活教育学系

表 1 論文報告数の推移

(2015年3月21日現在)

検索キーワード:「小学校」「いのち」「動物飼育」

(and検索) 単位: 件

年 \ 検索サイト	CiNii	Google Scholar
2001	0	2
2002	0	0
2003	1	0
2004	0	0
2005	2	2
2006	3	0
2007	2	2
2008	1	0
2009	1	3
2010	3	2
2011	2	1
2012	2	3
2013	1	1
計 (件)	18	16

2 先行研究

宮野ら(2006)は、動物飼育に限定せず、栽培活動、植物の観察、ものづくりもいのちの素晴らしさや大切さを感じる心を育てるために不可欠だと報告している。

中川(2007)は、現在の日本では、子育て家庭での抱けるペットの保有率は2割であるが、全国の9割の小学校が動物飼育を行っていることを調査しており、教科に動物飼育を位置づける学校の4年生の作文と、他校の6年生の作文を検討した。前者の児童の作文には周囲との関わりが書かれ、自他に対する肯定感、共感する心、支援する態度、生命尊重の態度などが表現されていた。一方後者の6年生の作文には、人との関わりは見えず、動物への偏見と誤解など非科学的で一方的な「社会批評」が書かれていた。二校間における感性の違いは明らかであった。また、3年の総合の学習に位置づけた別の小学校では、可愛がっていたチャボの死から、心を揺さぶる命の授業ができた。このことから、学校の動物飼育活動を3・4年の教科に位置づけ、獣医師と保護者の支援を得て、子どもたちに特定の動物に愛着を培うことで、具体的な「心の教育」「生物教育」を実践することが出来たと言える述べている。

竹内ら(2007)は、地域の教育力を生かし、飼育活動に取り組んでいる事例を取り上げることで、地域との連携を核とした飼育活動についての考察を行った。アンケート結果から、動物を教材として取り上げることに否定的な考えを持っている教師の課題点を以下のように述べている。

- ①教師の動物に対する苦手意識がある。
- ②動物のアレルギーや病気に対する対応など知識不足に不安を持っている。
- ③休日などの世話に対する協力体制に不安がある。

さらに、竹内は愛知県刈谷市立小垣江東小学校と岐阜県美濃市立洲原小学校の実践例を検討した結果、2校とも、獣医師、保護者との連携が見られ、しっかりとした飼育体制がとられており、そのことが教師の取り組みやすさにも繋がっていることを示した。飼育活動は、教師と子どもの二者だけで展開するのではなく、獣医師などの専門家の協力や保護者や地域の理解など4者で展開することでより高い教育効果が期待できると述べている。

今野ら(2010)は、国際的動向に比べ、日本において動物介在教育は普及していない現状にあることを述べ、2003年度より、立教女学院小学校で学校犬パディによって推進されている「動物介在教育(AAE)」について概観し、「動物介在教育(AAE)」の日本の学校教育における推進の可能性について検討報告した。学校犬パディの誕生の契機、学校犬の条件、パディ・ウォーカーの活動、パディとの学校生活、保護者の反応、いのちのつながり等の視点か

ら、バディによる「動物介在教育（AAE）」をみた。その結果、効果の大きい教育プログラムであること、責任の所在を明確にすることが必要であること、実際に活動をみることで賛同者を得られることが明らかとなった。つまり、今後、日本において、学校犬の誕生は十分可能であり、改めて「動物介在教育（AAE）」が学校本来の機能を回復させる大きな力となると述べている。

さらに、今野ら（2010）の続く報告によると、札幌市内の全公立小学校を対象に実施した郵送による質問紙調査（回収率41.9%）から、動物介在教育の実態と課題を捉えた。その結果、既出の今野（2009）と重なる点があるが、以下の諸点をとらえることができた。

- ①「動物介在教育（AAE）」ということばについて知っている者は約2割と少なかった、また、動物愛護教室の活動は、ほとどの学校も取り入れておらず、今後も実施する予定がなかったことから、「動物介在教育の推進を目指す国際的動向」とは大きく異なる札幌市の実態を把握できた。
- ②動物介在教育の一環である「動物飼育」は、9割以上が必要性感じており、札幌市内の小学校では8割を超えて実施されていた。「動物飼育」の目的として「生命の大切さに気づかせる」が約9割、「思いやりの気持ちを育てる」「動物をかわいがる気持ちを育てる」は約6割、「責任感を育てる」「豊かな感受性を育てる」「ふれあいを体験させる」は約5割に見られ、動物飼育への期待が大きいことが考えられた。
- ③動物飼育の目的と効果に着目すると、最も大きなねらいである「生命の大切さに気づかせる」に関しては、「生命の尊さを実感できるようになった」「生き物の気持ちを考えるようになった」が2割程度であり、この目的に達することは難しいことがうかがえた。飼育の目的と期待する効果から、介在動物もしくは飼育動物の選定が必要であることが推測された。
- ④困難点として「長期休業中の飼育」が8割を超えた。しかし、長期休業の世話を苦痛に感じない動物好きな教師が率先して動物飼育を行うことが困難点の解消につながると推測され、動物介在教育の推進校で、一教員が学校犬の世話全般について責任を持っていることが参考になると考えられた。
- ⑤近隣の専門家について4割程度しか連携がなく、学校側の取り組みの不足や努力不足が指摘された。推進校では、動物介在教育を進める上で、動物犬のしつけのため、保護者の理解を得るため、バディ・ウォーカーの育成のため、妊娠・出産を通してのいのちの大切さを伝えるため等、目的に応じて、専門家を活用して、その効果を得ており、この実績に学ぶ必要がある。
- ⑥推進校において「相棒・仲間・友達」の意味を込めて名づけられた学校犬バディは、子どもたちと様々な体験を共有しながら、本当の「相棒・仲間・友達」に育っている。
この例に学ぶことで、今後、札幌市において、学校犬の誕生は十分可能であり、改めて「動物介在教育（AAE）」学校本来の機能を回復させる大きな力となることが考察された。

加田ら（2012）らは、子どもが他の動物の命をもらって生かされていることを認識し、命に対する感謝の心を持つようにと考え、家庭における動物の命と畜産物の関連性に関する教育の実態調査を行った。都内の中高生1,117人およびその保護者1,009人の計2,126人にアンケートを行ったところ、生徒は小学校低学年までに肉が動物であることを知り、保護者も教えていることが明らかとなった。肉を生産する動物について、生徒は動物の命を奪って肉が得られるという内容を多く聞き、また保護者も話しており、動物の命と食肉の関係について子供がしっかりと理解する機会を持っていることは判明したが、生徒は肉が動物であることを自然に知った、覚えていないとする回答が多く、家庭で教えられた記憶を持ちにくいことがうかがえた。肉と動物については、教育する側とされる側の意識の違いが示され、今後の課題とされた。

杉本ら（2013）は、現在学校教育の中で行われている「いのちの教育」の実際について、文献や学校教育関係者からの情報収集を行い、子どもの発達段階や学習段階を踏まえて、どのような時期にどのような「いのちの教育」が適切であるか、そのあり方の概要を示し、看護師がどのような役割を担えるかについてまとめた。また、小児看護専門看護師4名、高等学校教諭1名、特別支援学校大学病院内教室教諭6名にそれぞれ、インタビュー調査をしたところ、いずれにしても命の教育の有効性を具体的に報告していた。これらの結果から、学校や地域と相互交流する場を広げていくことが看護師による子どもへの「いのちの教育」になるということを報告している。

濱野（2012）は、小学校の悲嘆を伴う死別経験が、生命尊重への意識や動物への態度に与える影響について、小学生219名の質問紙調査から以下のことを考察した。

- ①自分や身近な人の命、動物の命について、ほとんどの児童が大切にしなければならないと強く感じていた。それに比較して、知らない人の命はどちらともいえない、大切にしなくてもよいという回答が多かった。これにより、児童が身近な人と縁の遠い人の命の大切さについて区別していることが分かった。
- ②動物の種類による好き嫌いの程度は、イヌとネコはほとんどの児童が好きと回答した一方、ニワトリに関しては多くの児童が嫌いと回答していた。ニワトリは、多くの小学校で飼育されていることから、教員の学校動物飼育への関わらせ方の態度や環境、もしくは動物種の選定について考慮する必要があるといえる。
- ③若干名の児童が、動物へ暴力をふるってよいと回答していた。国内外で問題とされている青年や児童が人を殺傷した事件では、必ずと言っていいほど以前に動物虐待を行っているケースが多い。人とペットや動物との関係は、自分の対人関係の方略が投影されることがあると考えられる。
- ④動物への態度について、因子分析を行った結果、動物保護と動物愛護の因子が抽出された。動物への態度は、保護と愛護という2側面からなることが分かった。また、動物への態度については、女兒の方が男児よりも動物保護と動物愛護への意識が高かった。小学生を対象とした共感性と愛他性の表出の一部と考えられるのでこの知見と一致する。
- ⑤悲嘆を伴う動物との死別体験がある児童の方が、経験がない、わからない児童よりも動物保護や動物愛護に対する意識が高かった。愛着対象の喪失は、悲しみを伴うが、その経験が、死や命について考えたり人格的成長をもたらしたりすることが明らかにされていることから、大切な動物との死別体験が、動物への態度に影響を与えていたと考えられた。

生命尊重の教育には、生と死の両面からのアプローチが重要である。身近な人との死別体験の“有無”が個人の死に対する態度に明確な差異をもたらすのは児童期までであるという指摘の通り、児童期までに子どもの発達を考慮した死の教育を含めた生命尊重の教育を行うことが肝要であると述べている。

斎藤ら（2012）は、学校における動物の飼育活動は生命教育の一環としての重要性を増す一方で、多様な問題に直面しているとし、ヤギを題材にとり、教員養成課程における動物飼育活動を宮城教育大学で実践した。この飼育活動を基に、学校における飼育動物の意義、飼育の手法と留意点を検討した。また、飼育における今後の課題として、餌代の負担、長時間無人の場所で繋留することの難しさ、小屋の工夫などが挙げられた。これらの課題を基に、今後もヤギ飼育を実施していく予定であると提言している。

藤岡（2013）は、子どもと動物の関係に関する最近の海外の実証的研究の知見を踏まえて、動物介在教育としての学校での動物飼育の意義を検討した。以下にまとめると、

- ①不安定型のアタッチメントパターンを持つ男児31名（7歳から12歳）を3条件に分け、実験的な対人ストレスの状況に置かれた際に犬がいる条件、フレンドリーな人がある条件、おもちゃの犬がいる条件で、ストレスレベルを測定した。その結果、犬がいる条件は他の2条件に比べて生理指標ではストレスレベルが低いことが見出された。また、子どもが犬をなでるほど、ストレス反応の報告は少なかった。
- ②子どもには動物への原初的な興味があり、ペット飼育は自分とは異なるニーズを持つ他個体の世話という、他では引き出せない行動を子どもから引き出してくれる。そして、全部ではないとしても少なくとも一部の子どもに対して、動物は“癒し”効果を持つ。また、因果関係は言及できないが、ペットに思いやりを持って関わる子どもは他の人間への思いやりも高く示した。

現在約9割の小学校で動物飼育が行われているが、それは適正あるいは有効に扱われていない場合がある。動物飼育の教育活動としての実施は、教師の協働性、地域との連携、保護者との連携等、今日の学校経営に必要不可欠な要素を含める必要があると報告している。

以上、数少ない報告であるが、教師の取り組みに対する心情や教育効果に関するものなど、非常に興味深いものであった。その中でも、今野らは、学校での動物飼育の目的は「生命の大切さに気づかせる」が約9割と報告しているが、実践後の教育効果としては、本来の目的達成は僅か2割にとどまっていることを示している。これらの報告から、「この目的期待に添わない、矛盾した結果であるにもかかわらず、9割もの小学校で動物飼育を行っている理由は何なのであろうか」、「この期待に添わない結果は、何が原因なのであろうか」、「子ども達の動物飼育に対する正直な気持ちは、どの様なものであるのだろうか」という素朴な疑問を抱き、本研究の出発点となった。

3 研究目的

教育基本法や学習指導要領でいのちを大切にする教育や生きる力の育成が求められている。そのような教育の一方法として、動物飼育が挙げられ、飼育から出荷、肉の試食までの教育活動がいくつか実践されている。しかし、児童の心情変化の分析に関する報告はない。ゆえに、児童の作文を分析し、また、教師へのインタビュー結果を考察することにより、動物飼育活動の在り方や課題を探り、今後の動物飼育教育に資することを目的とした。

4 研究方法

4. 1 対象

本研究の対象は、F小学校5年で行われた家庭科や道徳・理科などを含む年間を通した複合型授業「食をみつめる」の学習活動で、児童（男子20名、女子16名）が書いた作文と、教師2名へのインタビューである。

児童の書いた作文は、以下の3期に分け収集し、1次調査、2次調査、3次調査と称し、分析対象とした（表2）。

1次調査：「豚を飼うことについて」をテーマとする作文。

平成25年5月25日の作文。豚を飼育するかしないか、クラスで議論した直後のもの。

2次調査：「豚と出会ってみて」をテーマとする作文。平成25年6月12日の作文。

豚の飼育が始まった日もの。

3次調査：「これからの食をみつめる」をテーマとする作文。平成26年3月12日の作文。

「食をみつめる」最後の授業後のもの。

表2 対象者数と作文平均文字数

	男子 (人)	女子 (人)	合計 (人)	作文平均文字数 (字)
1次調査 (H25.5.25)	18	15	33	438
2次調査 (H25.6.12)	19	16	35	505
3次調査 (H26.3.12)	20	16	36	613

(文字数の平均は少数第一位を四捨五入)

教師へのインタビューは、「食を見つめる」授業の終わった年度末に、2名（男女各1名）の教師がボランティアとして受けて、半構成インタビューを行った。

4. 2 分析方法

(1) 児童の作文

テキストマイニングを用い、作文に現れた児童の心情を中心に分析した。大隅ら（2004）¹は、テキストマイニングの定義を以下のように述べており、本研究に適しているためこの方法を用い、以下の①②③の順に分析を進めた。

- ・大量のテキスト、自然文や自然言語テキスト（言葉の表記体）、文章の集合体、文章の間に潜在する関連性を分析、隠れた意味のある類似性を発見し類似化する。またそれらを要約、視覚化し、理解可能な情報に変換するなどを行う一連の操作をいう。さらにその内容や情報を計量化し、その探査の推移を把握することから、新たな知見・知識を得る一連の接近法をいう。
- ・大量のテキスト、文章を数量化データと同様に自由に操作し（データ処理）、潜在する隠れた事実や関連性を発見することを目的とし、電子テキスト型データを直接扱う。
- ・高度に構造化されたデータベースから顕著なパターンを発見するため、データ・マイニング技法、あるいはその援用を受けたテキストマイニング手法により、有用な知識、知見を引き出すことを目的とする。

①データ処理

児童の作文は筆者が熟読後、文章をそのまま入力し、生データとしてExcelに入力してテキストデータ化した。その後、言葉の間違いを訂正し、形態素解析の精度を高める観点から生データを分析用データに変換した。

②形態素解析

テキストデータ化した作文について、1回目の形態素解析を行い使用された単語を切り出した。形態素解析エンジンには地名や名前などの名詞は含まれていない。また、「食べる」「いただく」のように同じ意味であるが、別々

に抽出されている単語が存在しているため、本研究に有用な単語を抽出するために、①同義語設定、②不要語設定、③キーワード設定を行った。

上記(1)(2)の前処理を行った後、2回目の形態素解析を行った。生データ(テキストデータ)と形態素解析結果の誤差を確認し、文章表現が一致しているか確認をした。

③クラスター分析

本研究では単語間の関連性を明らかにするための分析としてクラスター分析を行った。形態素分析によって出力された「テキスト×語のクロス集計(出現頻度)」データに主成分分析を適用し、求めた各変数の主成分負荷量をもとに樹形図を作成した。その後、分析データの類似語を同じグループ(クラスター)にまとめて命名し、対象間の関連性を読み取った。主成分分析には出現頻度4回以上の語のみを用い、主成分分析で得られた成分負荷行列のデータセットにクラスター分析を適用し樹形図を得た。

(2) 教師へのインタビュー分析

インタビュー時の聞き取りメモを素材として、2名分のデータを合わせ、複数人でカテゴリー分類を行った。

本研究では、分析ソフトはMicrosoft Excel 2010, mecab, cabocha, ttm, Rを用いた。

なお、作文の分析とインタビュー調査実施に際して、F小学校責任者、クラス担任、児童自身の許可を得て行った。また、調査用紙は無記名であり、データは個人が特定されないよう処理しており、多方面から十分な倫理的配慮を行って本研究を実施した。

5 結果及び考察

児童の作文分析と教師へのインタビュー分析の2つの調査結果について、以下に述べる。

5. 1 児童の作文分析

5. 1. 1 形態素解析

同義語設定、不要語設定、キーワード設定を行った後の、形態素解析に使用した同義語を表3に示す。

表3 形態素解析に使用した同義語

見出し語	同義語
食	食 食べる 食べ物 食う ご飯 食材 食料 給食 スープ 天ぷら スープ 天ぷら 野菜 栄養 ベーコン 材料 牛 具 いただく ソミュール液 食事 肉 魚 鳥 米 脂身 牛さん きゅうり 昼ごはん 朝ごはん タごはん 汁 鳥肉 豚肉 木の実 ブタ タマネギ 豚さん コンソメ 鳥さん 玉ねぎ チャーハン 豚 残飯 豚汁 昼食 パン かんきつ類 種 食べ物たち 肥料 ごちそうさま
自分	自分 日本 自分たち 私 日本人 それぞれ 僕 僕たち 僕ら 私達 飼い主 周り 個人 子どもたち 子供 クラス全員 全校生徒
命	生きる 命 生命 一生 生まれる 生き残る 人生 心 産まれる 産む 誕生日 生む
思考	考える 分かる 知る 学ぶ 考え 向き合う 意識 考えつく 考え直す 思える 振り返る 気付く 生かす 区別 見方 考え直す 調べる 考えつく 生かす 知れる 学べる 勉強 気が付く 考え方 伝わる 伝える 深まる 関心 受けとめる
思う	思う 思い 願う 想像 感じる 気持ち 実感 思いつく 感じ うかぶ 思える こみ上げる 感じとる 気 感覚 かんちがい 浮かぶ 感 思える 忘れる 感心 自信 不思議 イメージ 抑える テンション 心がける
豊富な量	たくさん 全部 みんな 大量 絶対 全て 全員 大勢 豊富 でかい かなり でっかい 皆さん 一流 数 足りる 余計 量 いくつ 全員分 一切 完全
驚き	とてつもない すごい ものすごい ひどい 最悪 ショック びっくり 驚く 衝撃的 最高 興奮 最低 感動 驚き 強い 意外 一番 限界 相当
多様	色々 それぞれ 個性 それなり 様々 普通 別々
変化	増える 長い 多い 広い 大きい 変わる 深い 早い 遠い 多く
量(小)	少し 少ない 減る 短い 最低限 小さい 半分 近い 低い 一部 一定 範囲
太陽と空飛	太陽 空飛 顔 子豚 豚たち ミニ豚 何頭 メス オス kg 名前 同士 太陽たち 空飛たち ペット 女 女の子 性別 男の子 男 豚同士
人	人 人たち 人間 人々 人達 相手 それぞれ あなたたち
世界	国 世界中 外国 他国 世界 この世 海外 世 この世 世界的 地球 世の中 国々 現地 アメリカ

プラス感情	楽しい 喜ぶ 幸せそう 達成感 楽しみ 楽しむ 嬉しい 幸せ かわいい 優しい 大丈夫 安心感 楽 きれい かつこいい やりがい 上がる 笑顔 笑 ドキドキ 緊張 緊張感 笑う
マイナス感情	悲しい 大変 辛い 泣く 悲しむ 後悔 怒る つらい 怖い 苦しい 苦しむ めんどく ぐやしい 不 満 不可能 切ない 涙 困る 苦労 不安 寂しい 悲しみ 心配 臭い 難しい 不幸 あせる ひとり 無理 困る きたない 悲しむ 残念 なさけない くよくよ かわいそう よぎる 我慢 大変そう 嫌が る
調理	作る 料理 加工 冷凍保存 調理 作り方 いためる 作れる 用意 かきまぜる むす ひたす 安心 安全 味付け 干す 煮る 切る 完成
エサ	サツマイモ キャベツ 好物 草 カブ エサ 水 根菜 粉 もみがら エサ場 エサ箱 メロンの皮 か んきつ類 袋 底
学校	クラス 先生 授業 学校 中学校 高校 家庭科室 活動 大学 教師 小学生 附属小 教室 附属小学 校 学習 小学校
時間	今 今日 未来 現在 将来 昼 11月 夏 冬 時間 今度 6月 4月 2月 今年 現実 昨日 いつ か 昔 去年 夜 春 今回 秋 朝 夏休み 毎日 明日 昼休み 朝昼晩 放課後 未来 金曜日 あと 間 最後 先 次 この間 予定日 休み その間 最初 その後 休み時間 前 日々 終わる いつ 一 瞬 今度 今頃 急 休む 機会 終える 予定 お昼
愛情	好き 愛情 嫌 嫌い 大好き 友情 好き嫌い 込める ささげる そそげる そそぐ
悪い	悪い おかしい 違う 反対 ダメ 違い
良い	良い いい 賛成
奉仕	届ける あげる 送る 教える 渡せる くれる 分ける 与える 渡す お返し 恩返し
主体行動	できる 見る やる 行動 続ける 行う みる 聞く 行動 経験 体験 求める 実践 やれる 見える 行く 動かす 見つける 集中 見れる 集める 集中的 見学 選ぶ 近づく 行ける 変わる 信じる 広げる 広がる 積極的 乗り越える つぶやく ふさぐ 広める 聞こえる 都合 やる気
観察	見える 確認 観察 差 眺める 見分ける のぞく 分ける みつめる 見つめる 見つけ出す 発見
関係性	励ます 関わる 関係 通じる コミュニケーション 起こる 比べる 興味 限る 関わり 起きる つな がる つなげる
話し合い	話し合い 話す 意見 発言 相談 言う 話 出す どっち 問題 分かれる 決まる 言い争う もめる 出し合う 話し合う 話題 まとめる それる 文句 争い 決める 解決 一言 話し合い中 悩む 迷う 質問 派 変わる 決心 納得 持ち越し 考え中 疑問 多数決 名前決め 答える 最優先 結果 断言 出る 中間派 語る 言える
残る	残る 残す 捨てる 余る 残り 粗末 減らす もったいない むだ
死	死ぬ 落とす 天国 亡くなる 失う 死 なくす 犠牲
殺し	殺し 殺す 傷つける 打つ
大切	大切 大事 重要 必要 貴重 責任 背負える 背負う 責任感 存在価値 平等
動物	動物 生き物 植物 生物 動物たち
味覚	味わう 味 まずい うまい 美味しい 食感 旨味
家族	弟 赤ちゃん 母親 おばあさん 家族 親 赤ん坊 お父さん お母さん 姉ちゃん ばあちゃん おじい ちゃん 祖先
言葉	言葉 理由 語る お願い 頼む
気温	寒い 暑い 気温 温度 冷たい 超える
貧しい	貧しい 飢える 貧乏
豊富	豪華 豊 大金持ち 裕福 豊か 豊富 お腹 お腹いっぱい
協力	協力 助け合う お手伝い ボランティア 気づかう 助ける 救う 役立つ 募金 アドバイス 応援 助 かる 支える 役に立つ 力 寄付 手伝い 助け 手分け ユニセフ募金 気遣い 合わせる
豚の鳴声	悲鳴 声 鳴く 鳴き声 大声 叫び声 叫ぶ キー ぐー プー
確信	確信 信じる 信頼 確か 約束通り 大丈夫
クラスメイト	加納君 のりこさん 小野沢さん 加納さん 里桜さん 恵さん 小野沢君 市川君 梅谷くん 琴葉 れん じろうさん 鈴木君 れんじろうくん れんじろうくんたち こうきさん 仲間 友達 友人たち
生活	生活 行為
始まり	第一歩 スタート 始まる スタートライン 第一歩目 ライン
前向き	克服 一生懸命 努力 真剣 必死 頑張る 全力 真面目 あきらめる
感謝	ありがたさ 感謝 ありがたい おかげ
迷惑	迷惑 失礼
高い	高い 進む
欲	欲 欲望 いたい

豚の行動	脱走 なれる 慣れる 一緒 来る 攻撃 出る 過ごせる 離れる 太る 過ごす 逃げ出す 寝る 送れる 一人ぼっち 大騒ぎ 仲良い 習性 住む 力持ち 住み慣れる 入る 覚える 話せる リラックス ぶつかる 来る 飲む 慣れる おとなしい あばれる 柔らかい やってくる 送る 寝転ぶ 突進 すごせる 浴びる 抵抗 元気 平気そう おびえる 転がる 降りる 活発 逃げる 動く 横たわる 走る ぬれる 勢い 天才 気に入る 震わせる うなる 冷静 静か 怖がる 乗る 歯ざしり 危険 眠い 臆病 様子 激しい 重い 横 痛い 性格 隅 中央 似る ハプニング 気持ちよい 気持ちいい 足す 歩く 真ん中 あふれる 本能的
出荷	出荷 お金 商品 見送る 別れ 別れる 再会 会う 出会う 帰る 戻る 帰り
思い出	思い出 写真 記憶 記念 よみがえる
豚小屋	豚小屋 小屋 柵 部屋 場所 水飲み場 ひも 板 トイレ 鍵 水入れ 設定 環境 平ら 金網 網
仮定	かも 万が一 奇跡
飼育当番	当番 役目 役 エサ当番 名簿 名簿順 班 試し 順番 守る 当番決め
取材・広報	テレビ局 取材 テレビ ラジオ カメラ 放送局 カメラマン テレビ名 ディレクターさん
豚の体	首 口 胸 頭 体 鼻 目 足 手 耳 背中 しっぽ のど 腰 おしり フン うんこ 毛 内臓 血管 くりくり 体重 体格 身 辺り 柔らかい 固い 匂い
けが	けが 体調 病気 ストレス 耳鳴り あざ 下痢 骨折 熱中症 口蹄疫 感染
畜産	漁業 畜産 農家 生産者 さじさん 夢牧場 飼育員さん さじさんたち 牧場ごと
飼育活動	育てる お世話 飼育 育つ 飼う 飼える 世話 かわいがる 遊ぶ 捕まえる 触る ふれあう 環境 おしゃべり 触れ合う 囲む 掃除 働く 持ち上げる シャベる なでる 感触 成長 接す 運ぶ 出す 触れる ブラシがけ 使う 入れる そろえる 作業 管理 取り組む 片付け 結び付ける 結ぶ 誘導 結びつける 捨てる 落ち着く 開ける 呼ぶ 外 破れる 引きずる 予想 覚える 注射 バケツ 離す しみつく スコップ つかむ 力 おす 整う 退治 呼べる ブラシ 捕まる 接する 抱っこ こぼれる あわてる ちぎれる 便利 呼ぶ ハプニング トラブル 落ちる 拾う 周り 追いかける 叩く 道具 軍手 石灰 移動 たたく 片付ける 逃がす 引く 引っ張る
豚の迎え入れ	登場 お祝い 祝福パーティー むかえる 連れる 無事 乗せる 任せる 準備 道路 貸す 受け取る 覚悟 待つ 待ち 乗っける 預かる 迎え入れる 到着 降ろす

5. 1. 2 1次調査

テキスト分析で得られた樹系図において、複数のカッティングポイントを試みた結果、Height（任意の高さ・実線）を2.5とした場合、意味のあるまとまりとして4つのクラスター（第Ⅰから第Ⅳクラスター）が抽出されたため、Height2.5を採用した。その後、樹系図のクラスターをグルーピングし（図1）、下記のような名称を付した。

第Ⅰクラスター：「Ⅰ：客観的飼育感」と命名

「飼育活動」「観察」などの単語群が挙げられ、未経験の豚の飼育について、客観的な飼育感を述べているため。

第Ⅱクラスター：「Ⅱ：主観的飼育感」と命名

「主体行動」「エサ」「思考」「太陽と空飛」などの単語群が挙げられ、飼育に対する自分の思いを述べているため。

第Ⅲクラスター：「Ⅲ：不安感」と命名

「悪い」「マイナス感情」「出荷」などの単語群が挙げられ、出荷に対しての不安やマイナス感情の記述があるため。

第Ⅳクラスター：「Ⅳ：迎え入れ準備」と命名

「豚の迎え入れ」「プラス感情」「命」「大切」などの単語群が挙げられ、飼育開始に向け、豚の命を尊重しながら話し合いをした記述があるため。

1次調査は、豚の飼育に向けての初期の作文を対象としている。飼育への期待感をもっている一方で、出荷への不安感やまだ経験したことのない飼育の客観視や実感を伴わないのちに対する意見など、他人事的で一般的な考えが述べられていた。先行研究で紹介した中川（2007）は、「人との関わりは見え、実体験がないため心からの感動や労働・苦勞もないことから、人に伝えたい事柄をもっていない」と述べており、1次調査結果はこの報告と似た記述がみられた。金森（2010）は児童の思いや考えをより深める言葉を育てることについて、以下のように述べており、この指導方針を1次調査段階での授業指導の参考にすることが提案される。

①子どもは言いたい、聴いてほしいという要求を持っている。その表現の場と時を保障し、出されたものを豊かにしていく日々の努力を学校と家庭の中で大切にする。

②友と友、子どもと大人の交わり、即ち社会性を豊かにし、子ども権利条約の言う意見表明を大切にする。

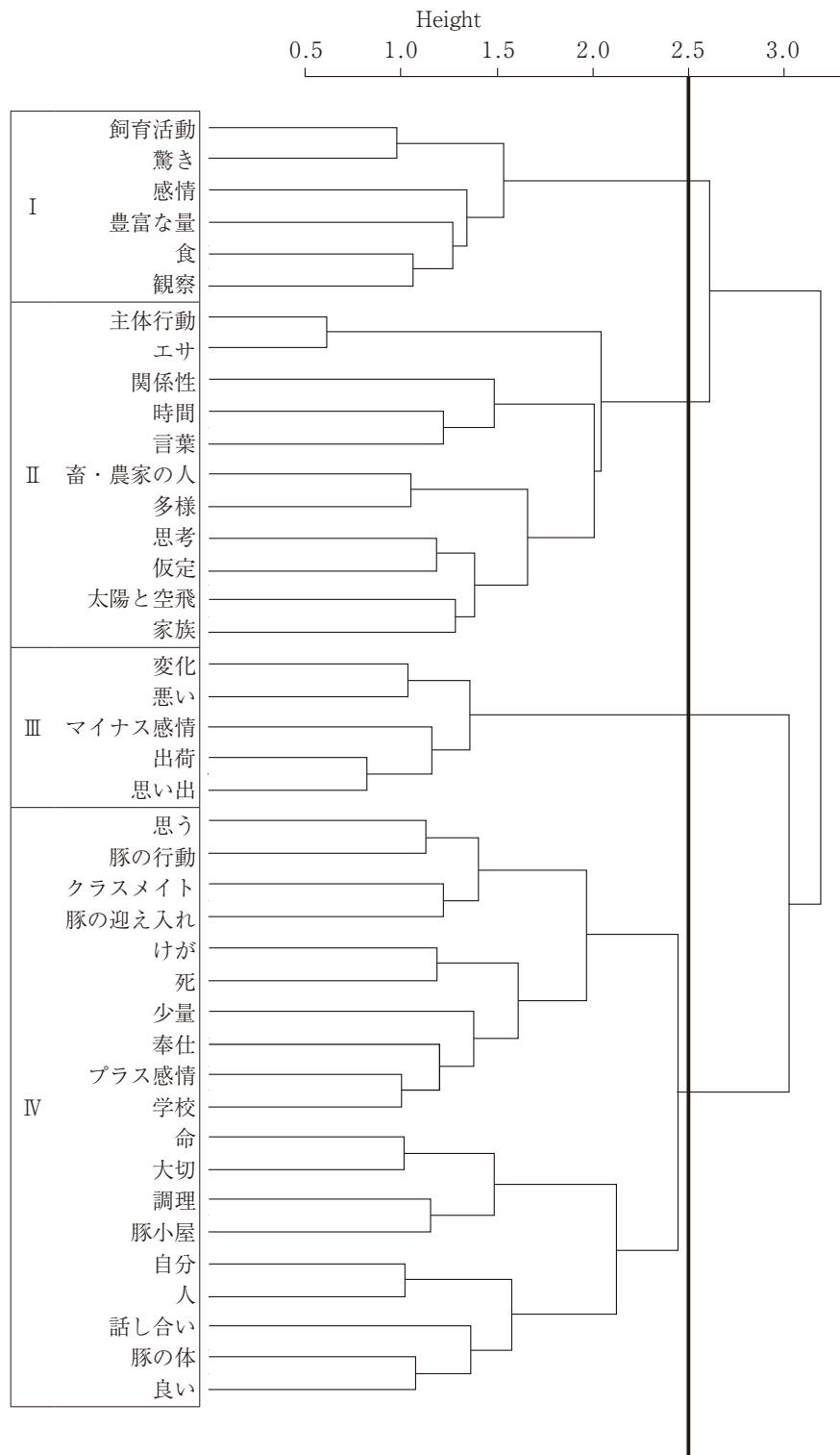


図1 1次調査結果の樹系図

- ③全ての教科，生活の場で意識的に言葉を広げたり，選択したりする。
- ④教師だけに向けられた単語発信の授業でなく，子どもが教師を含めた仲間に文脈のある考えを発表し，聴き合い，つなげ深め合うという生きた言葉が大切にされる授業をする。
- ⑤視（観）点・視角・視座を持つこと。それらを変えて見ること。複眼的な見方をするなどを，意識的に育てること。それらを生かし伝えたい相手を特定したり，主述の明確な文や語りを重視したりする。

このように、様々な場所、場面、言葉、人、視点から、児童の言葉を生かす活動を取り入れることで、児童が心で感じていることを引き出し得る授業ができるのではないだろうか。

5. 1. 3 2次調査

テキスト分析後、得られた樹系図において複数のカッティングポイントを試みた結果、Heightを2.5とすると6つのクラスター（第Ⅰから第Ⅵクラスター）が抽出され、この形が意味のあるまとまりとして最も適していたため、Height2.5を採用し、樹系図をグルーピングし（図2）、以下のように各クラスターグループに名称を付した。

第Ⅰクラスター：「Ⅰ：飼育活動感」と命名

「エサ」「飼育活動」「主体行動」「豚の体」などの単語群が挙げられ、実際に飼育活動が始まり、豚の世話の様子がうかがわれる。

第Ⅱクラスター：「Ⅱ：飼育準備感」と命名

「豚小屋」「話し合い」「飼育当番」「クラスメイト」などの単語群が挙げられ、これからの日常的な飼育活動に向けて、飼育当番等を学級全体で話し合っている表現である。

第Ⅲクラスター：「豚との触れ合い感」と命名

「豚の迎え入れ」「観察」「豚の行動」「豚の鳴き声」などの単語群があり、豚と出合いや触れあう表現がみられる。

第Ⅳクラスター：「豚との思い出作り期待感」と命名

「奉仕」「思い出」「死」「命」「プラス感情」などの単語群が挙げられ、豚飼育への期待感、命の短い豚との思い出作りに努めていく思いの言葉がみられる。

第Ⅴクラスター：「Ⅲ：不安感」と命名

1次調査の第Ⅲクラスターと同様に、「出荷」「太陽と空飛（豚の名前）」「マイナス感情」などの単語群が挙げられ、出荷に対しての不安やマイナスイメージの言葉がみられる。

第Ⅵクラスター：「Ⅳ：クラス一体感」と命名

「学校」「始まり」「関係性」「大切」「協力」などの単語群が挙げられ、クラスで協力する関係性を大切にして飼育に取り組もうとする言葉がみられる。

2次調査は、豚との関わりが始まったばかりであるが、記述の多くは実際に豚に触れた時の感触や豚への思いであった。自分たちで飼育をするという実感が湧き始め、クラス全体で協力して飼育に取り組もうとする姿勢も見られた。しかしながら、1次調査に引き続き、出荷への不安感を抱いている記述が見られた。クラスで協力し期待しながら飼育を行っていかうとする反面、出荷への不安を抱いているのは児童にとって辛いことであると考えられる。このような気持ちを和らげるために、水野ら（2010）は、絵本を通して「死」をありのままに示しつつも、子どもに不必要な恐れを抱かせることなく、いのちの教育を行うことができると述べている。対策としては、学級文庫としてのいのちに関係する本を置いたり、いのちについて考えを深められるような映画と一緒に観たりするなど、「いのち」「生」と「死」について考える機会を増やしていくことは大切である。

なお、「いのち」「生」と「死」を題材とした内容で、学級文庫においたり、授業で扱ったりする教材として、筆者が推進する絵本、写真集、DVDを以下に示す。

- ①100万回生きたねこ（絵本）
- ②だいじょうぶだよ、ゾウさん（絵本）
- ③わすれられない おくりもの（絵本）
- ④花さき山（絵本）
- ⑤いのちのまつり「ヌチヌグスージ」（絵本、DVD）
- ⑥つながってる！「いのちのまつり」（絵本、DVD）
- ⑦おかげさま「いのちのまつり」（絵本、DVD）
- ⑧絵本 極楽（絵本）
- ⑨絵本 地獄（絵本）
- ⑩おおきな木（絵本）
- ⑪葉っぱのフレディーいのちの旅ー（絵本）
- ⑫つみきのいえ（絵本）

- ⑬ぶたばあちゃん（絵本）
- ⑭恋ちゃんはじめの看取り（写真，絵本）
- ⑮月になったナミバあちゃん（写真，絵本）
- ⑯白衣をぬいだドクター花戸（写真，絵本）
- ⑰いのちのバトンを受けとって－看取りは残される人のためにも－（絵本）
- ⑱だいじょうぶ だいじょうぶ（絵本）

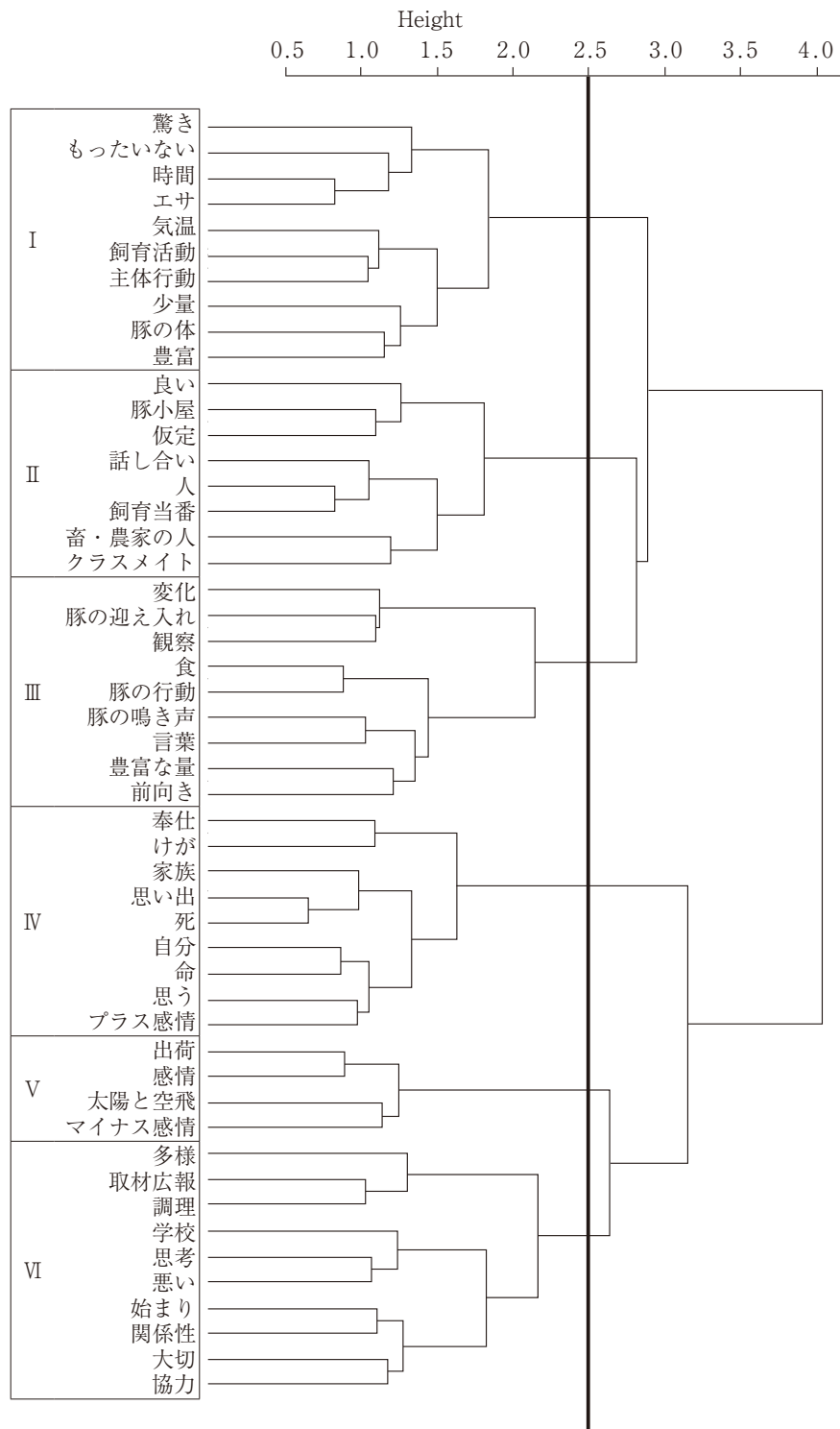


図2 2次調査結果の樹系図

5. 1. 4 3次調査

これまでと同様に、テキストマイニング分析結果で得られた樹系図において、複数のカッティングポイントを試みた結果、Heightを2.5の場合、4つのクラスター（第Ⅰから第Ⅳクラスター）が抽出され、このグループ分けが意味のあるまとまりであったため、Height2.5を採用した。樹系図をグルーピングし（図3）、以下のように各クラスターに命名した。

第Ⅰクラスター：「Ⅰ：食品としての豚肉」と命名

「調理」「エサ」「豚の体」などの単語が挙げられ、豚を食した言葉が出ている。

第Ⅱクラスター：「Ⅱ：飼育の思い出」と命名

「太陽と空飛」「出荷」「飼育活動」「プラス感情」などの単語群が挙げられ、飼育活動の思い出を振り返る言葉がみられる。

第Ⅲクラスター：「Ⅲ：世界の欲望感」と命名

「世界」「殺し」「欲」などの単語群が挙げられ、人間の欲望による殺人などの出来事が世界で起きているという葉がみられる。

第Ⅳクラスター：「Ⅳ：内面の向き合い」と命名

「良い」「悪い」「思考」「協力」などの単語群が挙げられ、食に対する意識を話し合いをとおして模索している言葉がみられる。

第Ⅴクラスター：「Ⅴ：食への向き合い感」と命名

「動物」「感謝」「大切」「畜農家の人」「命」などの単語群が挙げられ、畜農家の人への感謝や食としての動物に感謝する言葉がみられる。

第Ⅵクラスター：「Ⅵ：生活の見つめ直し」と命名

「前向き」「主体行動」「生活」「関係性」「生活」「もったいない」などの単語群が挙げられ、自分の生活の見つめ直しの言葉がみられる。

3次調査の時点では、豚の出荷を終え、豚との思い出を振り返りながら、自分をみつめ直している姿が作文から見受けられた。食品としての太陽と空飛（豚の名前）を食べたことで、食や畜農家に対する感謝の気持ちが生まれている。また、今の自分や社会の様子から、これから自分たちには何ができるのか、多面的な視野から考えている記述が見られた。出荷後、児童によっては複雑な思いを抱き、強い心のストレス感じている可能性がある。先行研究で海老根（2009）も述べているように、授業の流れの中に、気分転換をはかったり、ストレス低減をこころみる活動を取り入れるなど、心のケアへの対策が必要であると考えられる。

5. 2 教師へのインタビュー

本研究は、児童の作文分析に加え、平成24年度の学期末にF小学校の教諭2名にインタビュー調査を行った。インタビュー内容は、主として豚の動物飼育を通じて教師自身がどのようなことを感じながら豚や子どもと向き合ってきたかを尋ねた。今後の動物飼育実践の参考にすることを目的として、インタビューを基にした動物飼育の在り方や課題をカテゴリー化し、筆者の視点で以下に述べる。なお、本インタビュー調査は、個人的な応答であり、公的なものではない。

(1) 保護者との関係性

命を扱う活動であるため、保護者の協力はとても大切である。飼育活動の前に、保護者会等で詳しい説明を行うことで、保護者からの理解を得ることができる。また、動物アレルギーや飼育中の事故等の危機管理については、対応策をしっかり考え、非常事態に迅速に行動できる体制を学校全体で共通理解しておく必要があると考えられる。

(2) 教師の負担軽減

休日の世話、豚の健康管理等、動物飼育における教師の負担は大きい。動物の命を預かる以上、担任教師は誰よりも責任をもって飼育をする必要をしなければならない。このような負担を軽減させるためにも、家畜診療所や獣医師、保護者といった協力が不可欠である。飼育動物に何かあったらすぐに相談できる所を確保したり、チームティーチングとして他の教員に支援してもらったりと、担任一人で抱え込むことのないよう、教員同士の人間関係、管理職の配慮等の周りの環境を整えておく必要がある。教師の多忙化が問題とされている現在、動物飼育は教師の負担をよ

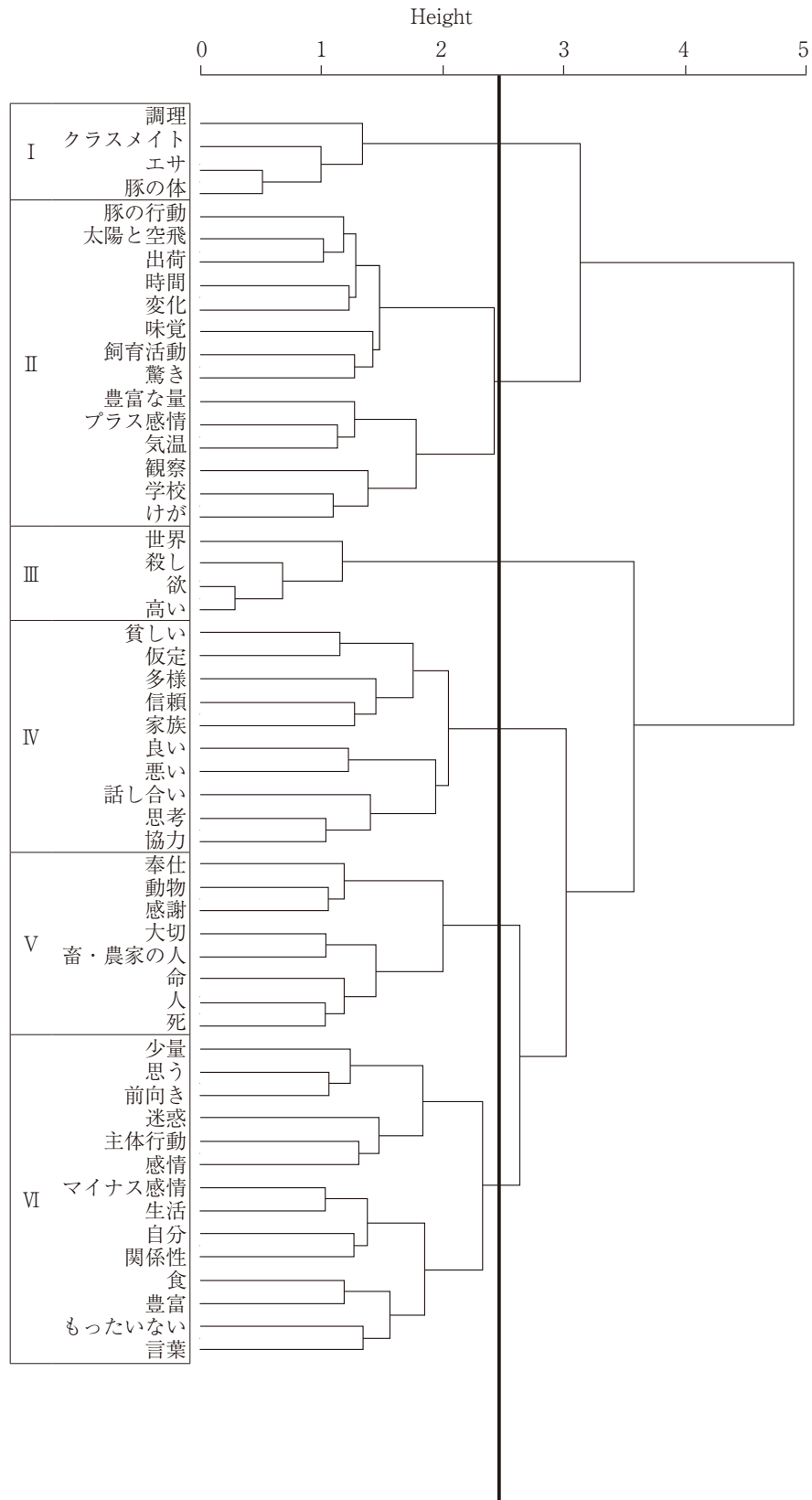


図3 3次調査結果の樹系図

り増加させる要因となると危惧される。

(3) 指導上の留意点

1日1日の児童の様子を見ながら、次の展開や活動を考えることが苦労点として挙げられた。児童も豚もその時そ

の時、様々な姿を見せてくる。その姿を基に、これからどのような活動をするのか毎日模索していたという。金森(2011)は、表面的なノウハウでは、人間教育はできないと述べている。今回の実践では、教師の表面的な指導計画通りに進めるのではなく、子どもの様子を第一に考慮した教育を行ったことで、児童にも良い影響をもたらすことができた。

また、出荷の体験を通して、子どもがトラウマを抱かないよう、配慮が必要である。教師として適切な判断が問われるところである。

(4) 対象動物の選定

動物の性格、飼育の難易度等を考慮し、学年や児童の実態に見合った動物の選定が必要である。現在、様々な動物が小学校で飼われているが、その動物の特性を教師がよく勉強し、理解した上で、動物を選定する必要がある。高学年であると、家庭科との連携も踏まえ、食と関わる豚や牛等の大型動物を飼育することもある。屠畜の場合は、放牧させず、小屋の中での飼育になるため、比較的飼育はしやすい。

また、何を目標とするかで、小型・中型・大型動物の選択が変わってくる。重点は動物との触れ合いなのか、生死と向き合うことか等、動物飼育の目的は様々であるため、目標や児童の実態を明らかにした上での慎重な選定が必要である。

(5) 教師の達成感

教師自身も豚の飼育は初めてであるため、小さな変化でも児童と共に喜びを分かち合える機会が多かったという。豚を誘導させて体重を測ることに成功したり、昨日は元気がなかったのに今日は元気にエサを食べている姿が見られたりと、ちょっとした瞬間が、教師にとっても嬉しい感情を味わうことができた。

また、豚小屋の中では、力を合わせて飼育する仲間として、教師と児童という関係が見えなくなる程、教師も一緒になって飼育に関わることができたという。動物飼育は教師と児童を繋げる、大変有効な仲介人であると考えられる。

このような経験から教師の苦労や負担が多い一方で、些細なことでも嬉しさがあると、活動をやったことに対しての達成感を味わうことができると考える。

(6) 出荷に際しての児童の姿

- ・本授業では、児童は、出荷を予想以上に淡々と受け止めていた。感情を露わに出して泣きだす児童が少なく、静かな見送りであった。その理由として、見送りの段階では、まだ死を意識しきれていなかったということや出荷前日に「笑顔で見送りたい」という意見が児童から出ていたため、感情を押し込めたということも考えられる。集団の思いと個々人の思いの双方に配慮が必要であることが確認された。
- ・出荷後、1年以上が過ぎても、豚の飼育の思い出は児童の心の中に強く残っている。久しぶりに児童に太陽と空飛の写真を見せたところ、真剣な様子で写真をじっと見つめていたという。時間が経ち、児童の思考が発達すればするほど、豚への気持ちが複雑になってくるのではないだろうか。これらのことから、児童にとって豚との思い出は、強烈な印象を残したと考えられる。
- ・学級のすべての児童が上記のような思いになるわけではない。出荷を経験しても、何も心に響かない児童がいるのは当然のことである。教師は労を擁することではあるが、児童を個別に見て、その児童にあった配慮が必要であると考えられる。

(7) 学校現場での豚の飼育活動の持続性

豚の飼育活動は、教師の豊富な経験と整った飼育環境が大変重要であると考えられる。飼育に関する知識はもちろん、児童の心のケアや死の受け止めさせ方等、相当な覚悟を持たなければ、児童も教師自身も命と向き合うことができない。豚の飼育は、児童に大きな衝撃をもたらす、授業としては迫力や緊迫感が大いにあるものではあるが、教師の負担や児童の心の負担を考えると、安易にはすることができない重い教育活動であると考えた。また、飼育環境についても、今回はF小学校での活動を取り上げたが、一般公立校で行うとすると予算や飼育場所、保護者理解等の点から一般的にできる教育とは言えないと考えられる。本活動の継続については、社会的背景も視野に入れた学校全体の重要課題であると考えられる。

(8) インタビューのまとめ

以上のように、出荷を見据えた豚の動物飼育授業は大きな教育効果があり、教師にとってもやりがい感をもつ授業である。しかし、保護者との関係性、教師の負担、学級環境等、複雑で大きな課題が山積していることが分かり、誰でもどこでも行える教育活動ではないことが示唆された。

中央審議会の「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について」において、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習＝アクティブラーニングを充実させていく必要があると述べられている。このことは、まさに研究題材となった「食をみつめる」の活動である。インタビュー調査を通して、豚の動物飼育の厳しさを実感することができた反面、信念をもって自分の望む活動を児童と一緒にやって挑戦し続けようとするプロ意識の姿に低頭している。

6 まとめ

3次期の調査・分析を概観すると、1次調査の段階では、児童は一般論的な態度の作文を書き、豚やいのちに対して他人事のような表現が見られたが、実際に豚と触れ合い始めた2次調査の頃になると、飼育を行うことで、自分の内面と向き合い、太陽と空飛に対する思いが強くなった記述が見られた。さらに、「食をみつめる」活動を終えた年度末の3次調査の時点では、出荷を終え、食肉として試食し、豚のいのちが終わったことに対して、「寂しい」「悲しい」というマイナス感情で終わるのではなく、この経験を通して今後自分には何ができるのか、世界や社会のために何をしなければならないのかという記述が見られ、思考の視野の広がりや内面化が見られた。これらの結果から、豚の飼育活動を通して、児童の心情が単に変化したに留まらず、今後の課題、自分の意見の明確化等の思考が育まれた。このことから、動物飼育が児童に与える教育効果は、大きいと考えられる。

しかしながら、児童の作文には最初から最後まで、「不安感」が存在していることは重要な留意点である。ケアは教師の範疇を越える部分もあるが、教室内の児童への責任を持つため、「教育」の中に「ケア」が必要になってくる。児童の心のケア、動物の健康管理、休業中（とくに長期休業中）の動物の飼育・管理、飼育経費など、授業担当教師の負担は大きい。ゆえに、学校管理職の配慮、授業担当教員に動物飼育は任せるのではなく学校全体での取り組み、地域住民との連携（特に、獣医師・保護者）が必要であり、喫緊な課題でもある。

さらに、昨今は、SNS（ソーシャル・ネット・サービス）が行き渡っているため、事情を熟知していない市民からの反応や、その連鎖拡大が行われるため、授業担当者のストレスは多大になってくる。

飼育から出荷、さらに食肉として試食に至るまでの授業は、先行研究で示された問題点である、教師側の期待と児童の視点からの教育効果のズレはなく、教育的には大きな意味を持つ。しかしながら、上記に示された課題が山積しており、試食に至るまでの授業は誰でも、気軽に行える授業ではないことが確認された。

筆者の持論としては、いのちの大切さを教育目標としてあげる教育での対象動物は、寿命の短い（寿命1年くらいが望ましい）小型動物で行うことが望ましいと考えている。また、畜農家が食肉用動物を飼育する場合は、彼ら自身の生計（いのち）がかかっているものであり、飼育動物に名前を付けたとしても、飼育する心構えは児童の場合とは根本的に異なっている。ゆえに、児童が名前を付けてペット状態で飼育する結果になった場合は、肉として試食すべきではないと考えている。そして、試食に至るまでの教育実践をする場合には、児童と教師双方への心のケアは十分配慮しなければならない。いのちの教育は「関係性」が重要なキーワードである。ゆえに、関係性を深く強く感じさせる教育実践であればよいのであって、その場合、教育目標への完全到達は難しいとしても、目標近くまで行くのではないかと考えている。本授業を行ったN先生に頭が下がるのみである。教育の効果は、結果が出るまでには時間がかかる。ゆえに、本授業を受けた児童の10年、20年後の追跡調査を行うことができれば大変興味深いと思っている。

引用文献

- いしかわ県民教育文化センター（2010）『金森俊朗からの心にしみいるメッセージ50選』 pp.29-30
 海老根理恵（2009）「死生観の関する研究の概観と展望」東京大学大学院教育学研究科紀要 第48巻 pp.193-202
 大隅昇他（2004）「テキスト型データのマイニング－最近の動向とそれが目指すもの－」 pp.135-159
 勝野頼彦（2013）「教育課程の編成に関するきそてき研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編

- 成の基本原理」国立教育政策研究所，全101 p
- 加田日出美他（2012）「家庭における動物の命と食肉の関連性に関する教育の実態調査」 東京農業大学農学集報 第56巻 4号
- 今野洋子他（2010b）「札幌市における動物介在教育(AAE)の実態と課題－モデル動物介在教育(AAE)の探究－」 人間福祉研究 第13巻 pp.29-42 pp.255-259
- 今野洋子他（2009）「北海道四都市における動物介在教育(AAE)の現状と課題－小学校を対象とした質問紙調査から－」 北翔大学北方圏学術情報センター年報 第2巻 pp.13-22
- 今野洋子他（2010a）「学校犬パディの示すもの－学校における動物介在教育(AAE)の可能性－」 北翔大学生涯学習システム学部研究紀要 第10巻 pp.151-163
- 今野洋子他（2010b）「札幌市における動物介在教育(AAE)の実態と課題－モデル動物介在教育(AAE)の探究－」 人間福祉研究 第13巻 pp.29-42
- 斎藤千映美，渡辺孝男（2012）「教育のための動物飼育の取り組みと課題－大学におけるヤギの飼育を通じて－」 宮城教育大学環境教育研究紀要 第14巻 pp.29-33
- 杉本陽子他（2013）「看護師による子どもへの「いのち教育」：実践例から看護師の役割を考える」 日本小児看護学会誌 第22巻 2号 pp.97-106
- 竹内弘倫他（2007）「地域教育力を生かした飼育活動のあり方：飼育活動の課題の解決にむけて（教育科学編）」 愛知教育大学研究報告 教育科学 56巻 pp.1-8
- 得丸定子（2008）『いのち教育をひもとく－日本と世界－』現代図書 得丸定子編著 p32
- 中川美穂子（2007）「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 4巻 pp.53-65
- 西野真由美，白水 始，後藤顕一（2014）「21世紀型能力」の明確化で教育はどう変わるのか ベネッセ教育研究所 VIEW21 August, pp.42-47
- 濱野佐代子（2012）「小学生の対象喪失の悲嘆経験と動物への態度との関連－生命尊重の教育を資するために－」 帝京科学大学紀要 8巻 pp.93-99
- 藤岡久美子（2013）「子どもの発達と動物との関わり－動物介在教育の展望－」 山形大学大学院教育実践研究科年報 第4巻 pp.4-11
- 水野智美他（2010）「幼児に対する命の教育」日本教育心理学会総会発表論文集 52号 pp.116-117
- 文部科学省（2014）「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1353440.htm

参考文献

- いとうひろし（2008）『だいじょうぶ だいじょうぶ』講談社
- 草場一壽（2011）『おかげさま「いのちのまつり」』サンマーク出版
- 草場一壽（2012）『つながってる！「いのちのまつり」』サンマーク出版
- 草場一壽（2012）『いのちのまつり「ヌチヌグスージ」』サンマーク出版
- 國森康弘（2012）『恋ちゃんはじめての看取り』農山漁村文化協会
- 國森康弘（2012）『白衣をぬいだドクター花戸』農山漁村文化協会
- 國森康弘（2012）『いのちのバトンを受けとって－看取りは残される人のためにも－』農山漁村文化協会
- 國森康弘（2012）『月になったナミばあちゃん』農山漁村文化協会
- 斎藤隆介（2009）『花さき山』岩崎書店
- 佐野洋子（2009）『100万回生きたねこ』講談社
- シェル・シルヴァスタイン 村上春樹訳（2010）『おおきな木』あすなろ書房
- スーザン・パーレイ 小川仁央訳（2009）『わすれられない おくりもの』評論社
- 西川隆範 舩田英伸監修（2012）『絵本 極楽』風濤社
- 平田研也（2009）『つみきのいえ』白泉社
- マーガレット・ワイルド 今村あし子訳（2003）『ぶたばあちゃん』あすなろ書房
- 宮次男監修（2012）『絵本 地獄』風濤社
- レオ・バスカーリア みらいなな訳（1998）『葉っぱのフレディ－いのちの旅－』精興社
- ローレンス・ブルギニョン 柳田邦男訳（2009）『だいじょうぶだよ，ゾウさん』文溪堂

Elementary school children's emotional changes raising pigs to slaughter

Midori ISHIKAWA* · Tomomi ONODUKA** · Syogo YOSHINAMI*** ·
Kazuki OKUI**** · Sadako TOKUMARU*****

ABSTRACT

The Fundamental Act of Education and national curriculum guidelines mandate cultivation of zest for living and education of respect for life. In response, some schools teach children to raise animals, ship them to slaughter, and eat them; yet no one has studied its emotional impact. We analyzed children's essays and interviewed their teachers to identify issues arising in their pig raising activities. Their essays gradually evolved from impersonal to more personal, and from mundane to global concerns. While they learned many things through raising pigs for butchering, the theme of anxiety pervaded their essays, indicating a need for emotional care. Their teachers not only enjoyed a sense of fulfilment but also felt serious psychological as well as scheduling pressures, suggesting a need for support involving the entire school, parents, and wider community.

* Hirokami Higashi Elementary School ** Nagaoka City Fusoki Elementary School *** Gyoda City Nishi Elementary School
**** Kobe Shoin Women's University ***** Natural and Living Science